



Executive Interview

エグゼクティブ
インタビュー

no.9

このコーナーは神奈川トヨタのお客様である経営者の方にお話を伺うコーナーです。

株式会社 ケイス 代表取締役

加藤 好男 様

横浜の地場産業の捺染技術で、てぬぐい・風呂敷・ハンカチなどを生産。絵として飾れるアイテムや、てぬぐい本®など、優れたデザイン性と遊び心溢れる布製品を数多く生み出し、幅広い層に支持されている株式会社 ケイス 代表取締役加藤 好男氏にお話を伺いました。

■ 横浜の地場産業 捺染で幅広いテキスタイルを展開

—— ケイスという店名の由来は

元々は濱文様^{はまもんよう}という社名だったのですが、スカーフ・ハンカチなど洋物を作るときに、濱文様という名前だけでは、和物専門と誤解されやすく、“はまぶんさま”って呼ばれることも多くまぎらわしい。当社は幅広いテキスタイル（布地・織物）部門を目指していますから、柄がいろいろ出てくる玉手箱のような箱（case）ということでケイスとしました。

私どもの会社は昭和23年に父が創業、横浜の地場産業である捺染工場から始まっています。捺染とは生地の上に印刷、染めることです。横浜はシルクの集散地でスカーフやハンカチを主に生産していました。当時の横浜には捺染工場が大岡川、帷子川の川沿いに点々と120社くらいありましたが今ではほとんどなくなってしまいました。うちも工場は

山形にあります。以前はお客様の希望する柄、配色など、お客様の要望に沿って染めるだけというような加工作業を主に40年くらいやっていました。インドの民族衣装のサリーなども昭和の終わりまでやっていました。サリーは腰からまいて肩で下げて結ぶもので、大体6ヤード5.5メートルくらいなのですが、最後に肩にかけるところだけ違う柄をプリントするという特殊なプリントの仕方があって、全国でうちだけしかやっていませんでした。このような特殊な仕事はなくならない



からと言われて続けてきましたが、大量生産できる工場や外国産の台頭など時代の流れで、主たる事業だったサリーも10年続けていくうちにぱったりなくなってしまいました。こういう苦い経験もあり、自分たちが企画したものを、自分のところの工場で作り、自分のところで販売しようと稼働したのが濱文様です。

濱文様では、創業以来の捺染技術を生かし、新作の柄をどんどん出しています。春・夏・秋・冬それぞれ季節に応じて商品のラインナップを入れ替えています。柄に関しては遊び心、可愛らしさとか、粋でおしゃれな感じを大切にしています。

和物は今では若い人にもわりと受け入れられていますけど、15年くらい前までは“ダサイ”という感じだったんです。そこで、百貨店の売り場に置いてもらってもおかしくないような和物を作ろうというくくりで品物づくりをしました。百貨店のハンカチ売り場やスカーフ売場って、一階の一番いいところにありましたから、やはり



自分たちが作りたいものを自分たちで 企画・デザイン・製作・販売。 遊び心で和小物をもっと身近に。



そこに置きたいという思いが強くありました。うちの場合だと配色自体がスカーフやハンカチっぽい配色になっていて、それがなかなか評判よくて使ってもらえるようになってきました。

■ 濱文様らしさを追求し さらなるステップアップを

—— 濱文様ブランドの核である遊び心の 原点を教えてください。

私はサップ (SUP) と呼ばれるスタンドアップパドル・サーフィンが趣味で、週末は葉山に行っています。時間の余裕もでき健康のため葉山マリーナの前から海岸を森戸海岸あたりまでただひたすら歩いていました。せっかく海が近いのもったいないなあと思っていたところ、たまたまサップを教えてくれる人がいて、やり始めたら面白くってはまっちゃいました。愛車のEJクルーザーは道具を一式載せても余裕で、乗り心地も含めて最高です。来月68歳になるけど、この歳でやっている人はなかなかいないですね。1960年代には、横須賀のどぶ板通りでバンドもやっていました。当時はベトナム戦争の最中で、観客の駐日米兵たちもいつ

死ぬかわからないような状態でしたから、とにかく飲んで騒いで凄かったですね、喧嘩なんかビール瓶で殴りあう映画みたいな凄い光景も目にしました。そんな経験も遊び心の肥やしになったのかな。

—— 今後の目標を教えてください

アメリカに進出して、日本の民芸品としてではなく、雑貨屋さんにおいてもらえるようになりたいですね。

濱文様を始めた頃は自分たちの好きなものを作っていればよかったのですが、売る範囲が広がってくると、多様なお客様のニーズに合わせいろんなものを作ってしまう。一つ一つのアイテムはいいねと言ってもらえるのですが、トータルで見渡すとバラバラなんです。そこでトータルのブランディングの見直しをしようかと思っています。まずは大事な色から、ブランドの色、濱文様カラーをもう一回見直す。例えばピンクならこの10色の中でというような感じで、固めて



株式会社 ケイス

〒233-0004 神奈川県横浜市港南区港南中央通8-22
TEL : 045-847-2431
URL : <http://www.hamamonyo.jp/>

いくことをやろうかなと思っています。エルメスやセリーヌなどビッグブランドはだいたい使う色は決まっています。だからそんなにぶれない。色だけでなく外部の人にも入ってもらって、一度ブランディングをきちんとやって、もう一步踏み出したいと思っています。



てぬぐい本®

てぬぐいを折り畳み、綴じ紐でとじて本のようにしたもの。綴じ紐をほどくと、てぬぐいは一幅の絵に。日本の風情が楽しめるものや動物の絵柄など、シーズン折々の新作が現在では30種類以上発売されています。てぬぐい本®は、2007年グッドデザイン賞を受賞するとともに、中小企業長官特別賞も受賞しています。

<インタビューを終えて>

どんないいものも使われないと滅びてしまう。濱文様のてぬぐいは、優れたデザインで、何かをぬぐう用途だけでなく絵のように壁に飾ったり、メッセージをこめたコミュニケーションツールとして愛用されたり進化しています。確かな捺染の技術に遊び心というスパイスを加え、幅広い世代に普段使いのおしゃれ雑貨として定着しつつあります。今後の進化が楽しみであるとともに、てぬぐいという文化は次の世代に残っていくと確信しました。